

第3章 共振する身体を映像で記録する

野澤 豊一

音楽パフォーマンスはいかに記述しうるか？

音楽やダンスといった「パフォーマンス・アーツ」を主な調査対象とする人類学者は、世界にどれくらいいるのだろうか？ あまり根拠のない予想だが、広く「芸術」と呼ぶ人類の営みを研究する人類学者のなかでも、たとえば造形芸術などと比べて、音楽パフォーマンスを研究する人類学者の割合はずっと少ないように思われる。その理由は、「開発人類学」や「医療人類学」のように現実的な応用が少しでも期待できそうな可能性に乏しいことや、同じ理由で社会的需要がないという実利的なものもあるだろう。私たちの生きている現代社会が、結局のところ、音楽にあまり大した意義を見出していないという、もっと根深い理由もあるのかもしれない。

しかしもっと単純な理由もあるだろう（そして、実際のところそれが最大の理由かもしれない）。それは、音楽やダンスのパフォーマンスというのは、専門化の進んだ音楽文化であれ、当該社会のメンバーの多くが参加できるタイプの音楽文化であれ、当のパフォーマンスが進行する場面を記述しようにも、それだけで困難を極めるという事実である。文化人類学者のフィールドワークにおける仕事の大半は、現地の人びとのもののやり方を記述することなのだから、いかに言葉で表現してよいかわからないもの（つまり記述できないもの）は、少くも興味があってもなかなか手を出せない。音楽などというものは社会に絶対必要なものでもないのだから、わざわざ苦勞して研究することなどない。——これが実情だということは、大いにありうると思う。

その証拠に、採譜という方法論が確立している民族音楽学の分野では音楽の研究は進んでいるのだし、人類学者による研究でも現地の歌の歌詞を記録したり分析したりするというのは、比較的よく目にする手法である——言うまでもなく、歌詞はすでに言葉になっているのだから、とりあえずの記述は可能である。しかし、その場で鳴り響いたかと思えばすぐに消えてしまう音、声質、人々の身体の動作、ダンス、表情、個人

間のやり取りなどが同時に進行するパフォーマンスの「現場」をどうやって言葉にしたらよいか、実のところ人類学者もまったくといってよいほどわかっていないのではないだろうか？

このことはしかし、音楽と身体的人类学的研究の意義を貶めるものではないはずである。それどころか、音楽パフォーマンスの研究は人類学一般にも大事な意義をもちうる。——人類学とはフィールドワークという全身的で全人格的な経験から何ごとかの問題を発見して、それを何とか言葉にし、思考しようとする営みにほかならないが、この時、最初にフィールドワーカーが感受するのは、輪郭のはっきりした問題ではない。最初は「かたちのないもの」として存在するありとあらゆるイメージを、なんとか「かたち」にして問題にしようと格闘することこそ、人類学の核心にある営みである（箭内，2008）。だとすると、音楽パフォーマンスの言語化を試みることは、文化人類学者がフィールド調査や論文を書くときにごく普通に行っていることと、原理的にはそれほど違わないことになる。（もちろん、それが簡単なことだと言っているのではない）。逆のいい方をすると、もし私たちが、前章で述べた「音楽と身体的人类学」を上手く構築することができれば、それは人類学全体にとっても大きな貢献となりうる、ということである。

映像人類学と音楽パフォーマンスの研究

その「かたちのない」イメージをも捉えようとする試みとして「映像人類学」の実践が近年注目を集めつつあるが、これは、音楽と身体的人类学的研究にとっても無視しえない動きである（eg. 新井・岩谷・葛西，2011；北村・新井・川瀬，2006）。実際、音楽やサウンドの質だけでなく、歌い踊る人びと動作や表情、人びとのあいだのマイクロなやりとりを記録するには、映像記録以上に容易かつ効果的な方法はないだろう。日本の映像人類学のパイオニアである大森康宏も、四半世紀以上も前から音楽パフォーマンスや宗教儀礼を撮影する重要性を指摘していた（大森，1984a：

449)。有名なところでは、米国の音楽研究者アラン・ロマックスによる世界のダンスの比較研究という壮大な試みがある (Lomax, 1995[1975]; Lomax & Paulay, 2008[1974-1984])。

前章で述べた「参加型音楽のパフォーマンス」の研究にとっても、映像は欠かせない役割を果たすはずである。なぜなら、トゥリノによれば、参加型パフォーマンスの場面はそもそもサウンドと身体運動の相互作用が起こる場として把握されるべきものだが (Turino, 2008: 28)、その場で瞬時に行きかうサウンドと行為の連なりを把握するには、現時点で映像記録以上に有望なツールは今のところないと言ってよいだろう。モダンジャズの即興をプレイヤー同士の相互作用として把握・分析したポール・バーリナーとイングリッド・モンソンは、録音を利用しつつ楽譜から分析を行った (Berliner, 1994; モンソン, 2010[1996])。いま想定しているのは、それを複数の身体相互作用にまで拡張するという研究プログラムである。

もちろん、なんでも映像で記録しておけば良い、などという簡単なものではない。——身体を含む表現文化の記述の方法論について、ある著名なアメリカの民族音楽学者と議論をした時、その人物は「最近のシカゴ大学出版の (民族音楽学の) 研究書にはほとんど音楽 CD が付いてくるのだから、君の研究成果も映像 DVD と一緒に公表すれば良い」と、さも簡単なことのように話していたが、私はそれほど楽観的ではない。第一に、撮影上の技術の問題がある。撮影する側は、自分の解明したいことがらをある程度以上は意識していなければならないが、音楽実践や儀礼の場面でどう撮れば良いかばかりを考えると、他のことに気がまわらなくなってしまうこともある。また、自身のための記録として撮影するのか、ある程度の作品にも使える映像として残すのかによっても、「どう撮るか」が変わってくる。第二に、映像を公表しようと思えば、被写体にその承諾をとる必要がでてくる。ミュージシャンだけを相手にするのであれば、まだそれほど難しいことはないであろう。しかし、黒人ペンテコステ派の礼拝儀礼のように、演奏家以外の人々が被写体になるケースでは、簡単に映像を公開することはできない。第三に、映像で記録を行うということは、文章で表現するのと同じで、ある種の表現行為である。研究者の記録したいもの、伝えたいものをその思惑通りに撮影するためには、技術的な困難が常にとまうものである。

最後の点を言い換えれば、映像記録にも限界がある、ということに他ならない。いくら映像を利用して音楽パフォーマンスの研究を行うにしても、研究者は細心の注意を払って音と身体記録を言葉 (文字) で記述したり表現したりする努力を怠るべきではない。大事なものは、文字記録 (表現) と映像記録 (表現) の両方の限界をわかったうえで、相互に補完的な関係をもたせることであろう。

いずれにせよ、最近では軽くて扱いやすい機材が多いので、少しでも音楽パフォーマンスに関心のある研究者がたくさん映像記録を残すこと自体は、大いに歓迎すべきことである。その成果をどのように公表したり共有したりするかは、今後の大きな課題であろう。

相互行為する身体を映像で記録する

上に描いたような問題を意識するようになったのは、私自身が調査にビデオカメラをもち込むようになってからである。そこで以下では、私自身がどのように映像を利用しつつ自身の研究を進めてきたかについて、簡単に述べることにしよう。

私がビデオカメラを利用しはじめたのは、大学院生になって修士論文のための調査を始めた約 10 年前からである。当初調査していたのは、東京を中心としたアマチュアのブラック・ゴスペル歌唱グループだが、そこで私が関心をもったのは「本格派」という評判をもつグループの (歌唱力とは少し違うニュアンスの) 「どことなしに感じられる迫力」だった。そのありがたが、参加者個々人の能動性にあるのではないかと直感した私は、リハーサル風景をビデオに撮り、それを微視的に分析してみたのである。すると、ミクロの対面相互行為の記録から、一人ひとりの歌手が「思いっきり歌うこと」に向かって解き放たれていく様子——これは、複数の身体が共振するというプロセスを含んでいる——を詳しく記述することが可能になった (野澤, 2009)。これなどは、調査と分析期間は短いものだったが、その制約のなかで効率よく成果を出せたケースだったと思う。

博士後期課程に進学して、アメリカの黒人教会をフィールドにしてからも、礼拝儀礼のビデオ撮影は私にとってごく普通の調査方法のひとつになったのだが、ここでちょっとした問題に出会うことになった。私は、常に自分自身のための記録として撮影するスタンスをとっていたので、「とにかく注意を惹かれたところにカメラを向けて、そこにズームする」という

写真 3-1 撮影時の様子（私がビデオカメラをもっている時にスチルカメラの撮影を信者の一人に依頼したら、その信者がとった写真）

撮り方をしていたのだが、礼拝儀礼では常にどこか一つのところに注目すべき焦点が集まっているなどということがない。私の後ろの方に座っている人が聖霊ダンスをはじめたかと思えば、礼拝堂の前方の端にいるミュージシャンがそれに呼応するように演奏をはじめ、牧師もそれを是認するようなしぐさをする——こうした光景を一人の人間が一つのビデオで撮ろうと思うと、カメラをあちこちに向ける必要が出てくるうえに、ズームインしたりズームアウトしたりで、後から画面を見ていると車酔いしそうになる映像ばかり撮れているのである。しかも、事例として面白ければ面白いほど、同時に複数の場所で色んなことが起こる傾向があった。

つまり、私の撮り方では、私個人が分析するのには都合が良いが、学会発表などに映像を織り交ぜようとしても、効率よくこちらの論点を伝えるための適当な場面が、きわめて限られてしまうのである。口頭発表の場というのは、映像記録が活躍するのにこの上ない機会なので、「車酔い動画」ばかりを量産するのはいかにももったいない、ということを経験して考えるようになったのである。また、口頭発表にビデオ記録を利用するようになってからというもの、映像自体としての面白さというものを考えるようにもなった。

今回の「頭脳循環を活性化させる若手研究者海外派遣プログラム」によるアメリカの長期調査が決まったのは、以上のような反省を踏まえて、これまでよりもレベルの高い映像を撮り、学会発表で活躍させたり、可能であれば短い映像作品を作れたら良いな、と考えていた頃であった。幸い、調査地のセントルイスでは、以前からつき合いのあった教会が快く撮影許可を出してくれた。ここは信者の数がせいぜい 50 人くらいと

いうこともあって、信者のほぼ全員が私のやっていることをわかってくれていたのも助けになったのであろう。反対に、同じく以前からお世話になっていた別の教会（こちらは信者数が約 300 人と少し多い）では、公開を前提としたビデオ撮影は許されず、個人で分析するための記録としてのみ許された。

実際に撮影を始めてみると、それまでは思いもよらなかった発見がいくつもあった。まずは、今回の調査ではじめて使用を始めた「三脚」の効果である。私は腱鞘炎持ちで、いかにホームユースの小型ビデオカメラといっても、長時間持っていると右手首が痛み出すので、当初は三脚にかなり頼った撮影をしていた。また、手持ちと比べると手振れが起こる心配がぐっと少なくなることもあって、少し遠くからでもズームを多用して撮影していた。ところが、撮影を始めてすぐに、この方法はうまくいかないということが判明した。少しでも離れた所から三脚を立てて撮ると、撮影された画がいかにも退屈なものにしかならないのである。これは、三脚のうえに設置して背景があまりにも動かないと、画に緊張感がなくなることがひとつの原因であったようだ。また、小さなレンズ一体型のカメラでは、ズームをすると画面が暗くなったり、人物の表情にいたるまでの描写がうまくいかないこともわかった。

今回は個人用の記録以上の魅力ある動画を撮りたかったということもあり、すぐに方針を見なおしたのだが、かといって、信者の人びとに近寄っていくのはなかなか勇気が必要なものである。しかも、ただ一瞬近づくだけではダメで、なるべく撮影したい人物にじっくりと寄り続けることも必要になってくる。結局、思っていたものに近い画が撮れるだけ十分に被写体に近づくことができるようになったのは、何度目かのチャレンジの後だった（私にとっては意外なことに、信者の人びとの方は私の予想していたのよりもずっと平気な顔で画面に映っていたのだが）。また、結局は今回も手持ちで撮影することが多くなったため、カメラの画面を見ながら礼拝堂のあちこちを動き回り、撮影中に足を踏み外したりすることも多く、見ていて酔いそうになる映像を量産してしまったのは、以前の調査と同じであった。これなどは、今後の改善が必要なところである。

さて、いったん映像を撮り始めると、今度は「次はこんな画が撮りたい」という欲が色々出てきた。しかし、礼拝儀礼で場面が次々に展開するなかに巻き込ま

れていると、考えていた画角を得るための正確な位置取りができないことも多い。そこで私がとった方法は、フィールドノートに簡単なスケッチを書いて、礼拝のどの場面にどこにいれば思い通りの画角が得られるかを書きこみ、礼拝儀礼の最中も常にそれを見ながら撮影する、というものである。このやり方によって、撮影効率はかなり向上した。

ところで、ビデオ映像の撮影ではどうしても避けられない問題もある。私が世話になったある教会の場合、スピーカーの位置と方向が私にとってはかなり不都合であった。この教会は、黒人ペンテコステ派教会の例にもれず、かなりの大音量のスピーカーを備えているのだが、そのほとんどが会衆の方を向いているので、牧師やミニスターなど、礼拝をリードする人にぐっと近づくと、音が遠くなってしまうのである。——実際にどんなふうに音声がとれているかは再生してみるまではなかなか分からなかったので、一度、説教壇にずっと近づいたままでカメラを回していたら、音がほとんど記録されていなかったという失敗もあった。そういう時に限って、映像としては見ごたえがあるものが多く、これには何度かがっかりさせられたものである。

映像記録の現地での活用

今回撮影した映像記録は、在外研究中にもいくつかの場面で使用することになった。まずは、2012年3月の末にミルウォーキーで行われた米国民族音楽学会中西部支部の年次大会である。過去の調査で撮影したものの方が発表用の動画クリップを選択する手間が省けて楽だったのだが、せっかくだからというのでいくつか選んで、それに合わせて発表を行った。評判は上々で、発表後も発表内容や映像についての質問やコメントをいくつかもらうことができた（むしろ、他の研究者の発表にあまり映像が使われていなかったことの方が、私にとっては意外なことだった）。

次の出番は、セントルイス短期大学フォレストパーク校 (St. Louis Community College, Forest Park) の音楽の授業でゲスト講師として招かれた時である。20分程度の学会発表であれば原稿を準備すればよいが、1時間を超えるレクチャーとなると、聞き手の反応を見ながら話す必要が出てきて、原稿にばかり頼るわけにもいかない。ということで、この時も多めに映像クリップに活躍してもらった。この時は大型のスクリーンが使用できなかったのが残念だったが、クラスの学生もとても熱心にビデオに見入ってくれた。やはり映像が

訴えかける力は大変なものだと思った次第である。

映像記録の利用は他にもある。調査でお世話になる教会信者に配るのである。特に、ミニスタたちが説教をした時のDVDや、クワイアで歌っているところのDVDなどを本人にあげると、とても喜ばれる。人類学のフィールドワークにとって、調査対象となる人々との信頼関係ほどに大事なものはないのだから、そういうふうに活躍できるという意味でも、これはビデオならではの長所と言えるだろう。

また、礼拝儀礼の様子を、特に仲よくしている信者の家で上映してみたこともある。ももとは、撮影した場面について質問をしようと思い立った計画だったのだが、信者の人びとに撮影内容をフィードバックすることで、何か面白い反応がないかということも少し期待していた。ところが、彼らの反応は私の予想をはるかに上回るものだった。——礼拝儀礼で感極まって泣き叫んだり、走りまわったり、聖霊ダンスをしたりという映像を見た彼らは、なんと、お腹を抱えて笑い転げていたのである。しかも、翌週の礼拝に顔を出すと、ビデオを見た人たちが別の信者に「あんたの映っている面白い場面があった」などと言いつらしているほどであった。——ところで、このようなエピソードは、人類学者にとってはむしろ大歓迎である。というのも、普段は見えない彼らのものの感じ方が、こうした時にこそ浮き彫りになるからである。これなどは、映像を使った調査のかなり貴重な副産物である。

撮影ばかりに時間を使うわけにもいかないので、アメリカ調査での撮影は3か月程度に期間を絞ることにした。目標としていた映像作品に十分な素材がそろったかどうかは、実際のところはよくわからない。撮っている最中は、教会ミュージシャンに関するものと、一つの教会に的を絞ったものの、二つが出来ればよいと考えていたが、編集作業では技術的なことも勉強する必要があるため、時間もそれなりにかかることが想定される。本格的な民族誌映画の制作ともなると、実際にあら編集してみないと足りない部分などがわからないとも言われているから（大森, 1984a）、場合によれば、完成までは追加の撮影が必要になってくるかもしれない。

撮影機材について

最後に機材についてもふれておこう。ビデオカメラは少し良いものを購入したが、それでもホームユースのものである。この種のテクノロジーは日進月歩なの

か、手ぶれの補正や暗部の撮影も数年前と比べて格段に向上しているし、軽量化も目を見張るほどの進歩がみられる。また、ソフト面も進歩も見逃せない。数年前には大量のDVテープを購入しなければならず、テレビの画面でじっくりとそれを見るのは日本に帰って来てからだったというちょっとした不便があったのだが、近年のビデオカメラは記録媒体がメモリーになったおかげでパソコン管理が簡単になり、どんな映像が撮れたかすぐにわかるようになった。外付けのマイクも購入したのだが、これは、ダイナミックレンジがビデオの内蔵マイクの方が大きいらしいことが判明して以来、特定の方向からの音声が必要な時(インタビューなど)のみの使用となった。

参考文献

- 新井一寛・岩谷彩子・葛西賢太(編). 2011. 『映像に宿る宗教、宗教を映す映像』せりか書房.
- Berliner, Paul. 1994. *Thinking in Jazz: The Infinite Art of Improvisation*, University of Chicago Press.
- 北村皆雄・新井一寛・川瀬慈(編). 2006. 『見る、撮る、魅せるアジア・アフリカ! ——映像人類学の新天地』新宿書房.
- Lomax, Alan. 1995(1975). "Audiovisual Tools for the Analysis of Culture Style," in *Principles of Visual Anthropology* (2nd ed.), pp.315-334, Mouton de Gruyter.
- モンソン, イングリッド. 2010 [1996]. 「音楽・言語・文化的スタイル——会話としての即興」宮脇俊文+細川周平+マイク・モラスキー(編)『ニュー・ジャズ・スタディーズ——ジャズ研究の新たな領域へ』アルテスパブリッシング. 283-314頁.
- 野澤豊一. 2009. 「コミュニケーション過程としてのグルーヴ——日本のゴスペル歌唱グループの事例から」『ポピュラー音楽研究』vol.13, pp.17-30.
- 大森康宏. 1984. 「民族誌映画の撮影方法に関する試論」『国立民族学博物館研究報告』9巻2号, pp.421-457.
- . 1984a. 「民族誌映画の編集にかかわる試論」『国立民族学博物館研究報告』9巻3号, pp.571-592.
- Turino, Thomas. 2008. *Music as Social Life: The Politics of Participation*. University of Chicago Press.
- 箭内匡. 2008. 「イメージの人類学のための理論的素描: 民族誌映画を通じての『科学』と『芸術』」『文化人類学』73(2): 180-199.

映像資料

- Lomax, Alan & Forrestine Paulay. 2008[1974-1984]. *Rhythms of Earth: A Global Anthology of Dance Seen in a Cross Cultural Perspective*. The Association for Cultural Equity.